
幸徳秋水の『廿世紀之怪物帝国主義』に関する一考察

— 近代文明の理念による帝国主義批判 —

服部 裕*

はじめに

ナポレオン戦争後の19世紀は資本主義を基盤とした近代が飛躍的に発展した世紀であった。それは、フランス革命が掲げた自由と平等と博愛という近代文明精神に基づいて、人々に現実の経済的豊かさを付与する世紀であるはずだった。実際に、国民国家の担い手となった人民はそれぞれの立場で資本主義を急速に発展させ、それまでの世紀に比べれば資本主義は確実に人々を豊かにしたと言える。その意味で、近代文明は人民を幸福にする理念と共に、経済をはじめとする現実の社会システムを飛躍的に発展させるものであった。

しかしその一方で、近代文明を支える資本主義はその宿痾とも言える定期的な不況に見舞われ、1873年になるとその後20年以上に及ぶ未曾有の金融危機に襲われる。そうした大不況の時代、資本主義経済の発展を支え、そこから不労所得を得てきた投資家は投資先を失い、余剰資本は増大の一途をたどることになる。投資家にとって余剰資本を抱えることは損失を意味する。そうした状況の中、従来の産業への投資先を失った投資家は、自らの利益を確保するために新たな投資先を求めることになる。彼らにとって新たな投資先になったのは、山師の事業家が最終的には国家権力と結ぶことで新たに獲得した海外領土で興した事業であった。ここに、山師の事業家、投資家（＝金融資本）および国家権力という三者連合が成立し、これが帝国主義を推進する基本的な構造となったのである。

こうした帝国主義の実態を数多くの経済指標や数値データを示すことで実証的に暴露し批判したのが、1901年に上梓されたJ・A・ホブソンの『帝国主義論』である¹⁾。その後、レーニンやヒルファーディングやアーレントなどによって様々な視点から帝国主義論が著されるが、いずれもホブソンの『帝国主義論』を基底、あるいは出発点にしていると言ってよい²⁾。例えば、レーニンは帝国主義を資本主義経済が「独占資本主義」という形態に至った「資本主義の最高段階」と捉え、経済はこの「過渡期」としての「最高段階」を経て必然的に「資本主義制度からより高度の社会＝経済制度へ」³⁾発展すると考えた。もちろん「より高度の社会＝経済制度」とはマルクス・レーニン主義による社会主義経済を意味している。しかし、レーニンの帝国主義批判には過度のイデオロギー性という限界を認めざるをえない。何故ならレーニンの帝国主義批判には、投資家が自由競争の中でカルテルやトラストといった組織を通して獲得した「独占」を、一党独裁の国家権力が横取りすることを正当化すること以上の意味が見出せないからである。暴論を承知で単純化すれば、金融および経済の独占と搾取が金融資本から一党独裁の国家権力に移しかえられるだけで、国民経済を支える国民にはいかなる利益ももたらされない。それは言うなれば、社会を牛耳るボスが金融資本家か

ら、国民生活を置き去りにして党の利益だけを追求する独裁的な国家権力に代わるにすぎないことを意味していたと言えるのである。そして、それはすでに歴史が明らかにしているところでもある。

ホブソンの帝国主義批判は、まさに列強、なかんずくイギリス帝国がその帝国主義政策によって覇権争いを繰り広げていた時代の真っ只中で発表された。つまり、当時の列強が進めた領土拡大政策のメカニズムを「帝国主義（Imperialism）」と呼ぶことで、新たな覇権主義の概念を歴史的に確立した最初の一人がホブソンだったと言えるのである。

そうした帝国主義批判の急先鋒であったホブソンの『帝国主義論』よりも一年早く、幸徳秋水（以下、秋水）は1901年に『廿世紀之怪物帝国主義』を刊行する。始まって間もない日本の近代史の脈絡だけを辿れば、秋水にこの帝国主義批判の書を執筆させたきっかけは、日本が列強の帝国主義に倣って己が帝国主義政策を国際社会に高らかに宣言した日清戦争（1894～1895年）だったと言える。しかし秋水の『帝国主義』を読めば、この書が単に日本の拡張政策を批判するためだけに書かれたものでないことは一目瞭然である。本文に先立つ「例言三則」に、秋水は本書を「述」⁴⁾した理由として「全篇の説、欧米識者の夙に苦言し痛語せるところ」（5頁）と述べ、先行する帝国主義批判を参考にしていることを明らかにしている。秋水は日本が起こした帝国主義戦争をきっかけとしながらも、同時代の世界の帝国主義を俯瞰しながら本書を著したと理解すべきなのである。

秋水はあたかもホブソンと歩調を合わせるかのごとくに、世界に先駆けて現在進行中の帝国主義を痛烈に批判した。とは言え、帝国主義批判の力点の置き方に関しては、両者の間には大きな違いがある。ホブソンが帝国主義のメカニズムを主に経済学的な視座から解明し批判した一方で、秋水は近代人が獲得したはずの人道的道徳の観点からそれを批判したのである。そして、秋水の道徳観が一貫して依拠するのは、ヨーロッパが確立した物心両面に及ぶ近代文明であった。帝国主義が近代文明の発展を支えた資本主義の徒花であることは論を俟たないが、それでも秋水は文明そのものを帝国主義の必然的原因とは看做してはいない。広く人民の幸福を可能にするシステムである近代文明を支えてきたものは自由と平等の理念、そしてそれに基づく人道の精神だったはずである。これが秋水が終生持ち続けた道徳的信念であった。こうした道徳観を以て、秋水は近代文明本来の道から外れ、諸国民の福利を阻害している帝国主義を論難したのである。

本稿に先立ち、筆者はホブソンならびにアーレントの帝国主義論について考察を加えてきた。21世紀の今もなお、世界各地では愛国主義が叫ばれ、自国だけの利益を追求する国家権力が跋扈している。世界列強の帝国主義政策の衝突がもたらした第一次世界大戦と第二次世界大戦の記憶が徐々に薄れてきた今日、世界は21世紀型とも言える新たな帝国主義的戦略に襲われている、と言ったら言い過ぎであろうか。いま世界に求められるべきは、より広くより多くの人々が公正な豊かさの恩恵を得ることである。それを実現するためには、経済的な豊かさを求めることはもとより、秋水の言説が訴えているように、その公正さを保障する文明の理念を改めて想起するべきではないだろうか。

以下、秋水がどのように帝国主義を理解し批判したのか、またそれによって如何なる社会をあるべきものとして捉えていたのかについて考察する。

1. 秋水の思想の国際性

秋水の生誕は1871年9月23日であるから、『帝国主義』を刊行した1901年4月当時、秋水は満29歳だったことになる。世紀末から新世紀の始まりのこの時期は、日本の帝国主義が本格的に始動した時代だったと言える。日本が帝国主義政策を採用した最大の動機は欧米列強の脅威を排除するためであり、そのためには自らが帝国主義国家として列強の仲間入りを果たす必要があると考えたからである。それを達成するには、一方で幕末に締結を余儀なくされた列強五カ国との不平等条約を解消することが急務であり、もう一方ではアジア唯一の近代帝国主義国家としてアジア地域における覇権を確立する必要があると考えた。そして、後者を実現するためには、是が非でも不平等条約を改正がする必要がある。つまり、領事裁判権の撤廃や関税自主権の回復などを盛り込んだ日英通商航海条約が締結されたのは1894年7月16日で、その9日後の7月25日に日清戦争が開始されたのは偶然ではなかったのである（清国への宣戦布告は8月1日）。

条約改正の背景には、1902年に締結することになる日英同盟と同様に、日本にロシア牽制の肩代わりをさせようとするイギリスの思惑があった。それは、東アジアにおける権益獲得を目指す日本にとっても利害が一致する内容であったと同時に、条約改正によって列強と対等な関係を構築するという長年の悲願が叶うことを意味していた。この条約改正を背景として、日本が本格的に大陸進出を開始したのが日清戦争だったのである。その結果、アジア唯一の近代帝国主義国家として旧来の帝国である清を打倒し、国際政治の舞台で列強と肩を並べることになった日本にとって、今や南下を目指すロシアは最大の仮想敵国となった。

そうした世紀末の状況の中、1900年に勃発した義和団事件をきっかけにして、ロシアは実際に満州の占領に着手し始める。この義和団の乱を契機に日本を加えた列強の中国への干渉は一段と激しくなり、満州の権益をめぐって直接的に利害対立する日本とロシアは武力衝突に向かうことになったのである。それを決定的に後押ししたのが、すでに上で述べたとおり、ロシアに対する牽制を日本に肩代わりさせようとしたイギリスの思惑によって締結された日英同盟だった。日本の領土拡張政策が日清戦争で現実のものとなり、また次にロシアとの戦争に向かおうとする状況の中、一貫して非戦を訴え帝国主義政策を批判したのが秋水だった。そして、その批判的言論の最初の集大成が『帝国主義』だったと言える。

以上のように、国内情勢から見れば秋水の帝国主義批判は日本の帝国主義政策が進展したという現実の文脈の中で説明できる。しかし日本の国力増大を多くの国民が歓迎するなか、秋水はなぜ帝国主義を否定したのだろうか。それを理解するためにこそ『帝国主義』を読み解く必要があるわけだが、その前に秋水を帝国主義批判に導いた外的な要因について見ておくことも意味あることだと思われる。

秋水は病弱だったために、必ずしもエリートの道を歩んだわけではなかった。英語の読解力は別として、秋水に終生変わらぬ自由思想を植えつけたのは中江兆民だった。ちなみに秋水の本名は傳次郎であり、最も愛された門下生だった傳次郎に秋水の号を与えたのも中江兆民だった⁵⁾。ルソーの『社会契約論』を『民約譯解』と題して翻訳した兆民から秋水は自由民権思想の真髄を学び、その延長線上で民主的な社会主義思想である社会民主主義に向かうことになったと考えられる。秋水の社会主義との出会いは1898年頃のことだと思われる。

この頃、秋水は片山潜らが主催していた社会主義研究会に入会したが、未だ階級イデオロギーとしての社会主義思想を持つには至っていなかった。その後1901年になると、秋水は横浜毎日新聞の記者の木下尚江や労働運動家の片山潜やキリスト教徒の安部磯雄ら五名と共に社会民主党を結成する。しかし秋水らが標榜する「社会主義」は明確に資本主義を否定する階級イデオロギーに貫かれていたとは言えず、むしろ貧富の差の是正や普通選挙の実施などを求めたもので、その実現を暴力革命ではなく立憲主義によって平和裡に目指していた。彼らの思想の根底には、暴力革命による国家体制の転覆ではなく、あくまでも立憲政体のなかで言論を通して社会を抜本的に改造しようという社会改良主義が流れていた。それは、安部磯雄が起草した「社会民主党宣言書」に以下のような条があることから明らかである。

昔から大革命を行なうのにあたって、腕力の助けを借りたことはすくなくありませんが、これは当時の時勢がそうさせたのであって、決して我々の見習うべきことではありません。我が党の抱負はまことに遠大で、深く社会の根底より改造を企てようというものでありますから、かの浮浪壮士がとるところの乱暴手段のごときは、断じて排斥しなければなりません。我々は剣戟よりも鋭利な筆と舌とをもっています。軍隊制度よりもなお有力な立憲政体をもっています⁶⁾。

少なくとも『帝国主義』刊行当時の秋水の思想が、社会契約論と立憲主義に基づくこうした社会改良主義に根ざしていたことは、先に引用した「例言三則」の次の条からも明らかである：「全篇の説、欧米識者の夙に苦言痛語せるところ。而して現時においてトルストイや、ゾーラや、ジョン・モルレーや、ペーベルや、ブライアンやその最となす（後略）」（5頁）。トルストイは平和主義者、ゾラは社会の底辺で抑圧された階級を文学表現の対象とした自然主義作家、そしてペーベルは革命政党であるドイツ社会民主党を興した後に、ベルンシュタインの修正主義と妥協して社会改良の必要性を認めた政治家である。（秋水の思想とドイツ社会民主党の修正主義の近さについては、後で詳しく論ずる。）

以上のように、秋水が標榜した「社会主義」は、1917年に実現するロシア革命以降の労働者階級独裁の社会主義とは根本的な違いがあった。財閥による経済および金融の独占と治安警察法制定（1900年）に如実に現れた自由民権思想の抑圧体制を打破しようというのが、秋水が目指した「社会主義」であり、その本質は体制転覆ではなく社会改良だったのである。日本国民の多くは政府および財閥の膨張政策を歓迎する一方で、その生活は極めて苦しいものであった。急速な近代化のなかで、日本社会は極端に偏った二極構造に陥っていたのである。そうした多くの人民の貧苦を抜本的かつ急速に改善しようとする急進自由主義が秋水の思想の実像であり、それを文字に結実させたのが『帝国主義』であったと言える。

秋水のこうした自由主義思想の形成に大きな影響を与えたと考えられるのが、イギリスの急進的自由主義者だったジョン・マッキノン・ロバートソン（1856～1933年）である。日常的にロイターなどの外電と英語の新聞や著作物を読んでいた秋水は、ロバートソンが著した『愛国心と帝国』（Patriotism and Empire）（1899年）に大きな影響を受けていた。このことは、山泉進が指摘している通り、山田朗の研究によって明らかになっている⁷⁾。さらにこうした研究を受けて、ペンジャミン・D・ミドルトンが秋水の『帝国主義』を単に日本の

政治社会状況の文脈だけでなく、当時の世界の帝国主義批判の文脈に位置づけることによって「急進的な自由主義者による帝国主義批判の重要な結節点」であることを明らかにしようとしている⁸⁾。

ミドルトンは秋水自身が言及しなかったロバートソンの『愛国主義と帝国』と共に、秋水が「例言三則」で言及している欧米の識者の思想をも詳細に読み解くことを通して、秋水の「テキストを、世紀転換期に生みだされた多くの自由主義の批判のネットワークのなかの重要な拠点として位置づけ⁹⁾」ている。秋水は『帝国主義』によって、世界の急進自由主義的な帝国主義批判の思想の結節点をなし、まさに当時現在進行形の帝国主義批判の潮流を生きていたと言えるのである。また、ロバートソンが思想的運動を展開した拠点がジョン・A・ホブスンも参加していたレインボー・サークルだったことを考えると、秋水の『帝国主義』とホブスンの『帝国主義論』はロバートソンを介して密接に関連していたと言っても差し支えないであろう¹⁰⁾。いずれにしても、近代国家の後進国である日本にありながら、世界的次元の思想を展開した秋水の国際性と同時代性は特筆に値する。別の言い方をすれば、秋水の思想は当時の日本にあってはあまりに時代を超える先見性に貫かれており、国家権力にとっては脅威以外のなにものでもなかったと考えられる。そして、その帰結が1911年の国家による秋水抹殺だったのである。

2. 道徳的観点からの愛国主義批判

秋水の帝国主義批判は極めて明快である。批判の対象である帝国主義のメカニズムを明らかにするために、秋水はそれを構成する二つの要素を抽出し、その本質を明らかにすることから始める。すなわち、帝国主義を駆動させる二つの動力の一つは愛国心であり、もう一つが軍国主義である。これは、「帝国主義はいわゆる愛国心を経となし、いわゆる軍国主義を緯となして、もって織り成せるの政策にあらずや」(19頁)という、秋水の帝国主義批判で最も広く知れ渡っている表現に簡潔に集約されている。『帝国主義』の本論の冒頭で帝国主義の基本構造を示した上で、秋水は「帝国主義の是非と利害を断ぜん」(20頁)とするために、世の多くの人々を熱狂させている「今の愛国心、もしくは愛国主義とは何物ぞ」(20頁)と問いかけるのである。

秋水の論の立て方には特徴がある。一つは最初に結論を述べたあとに具体的な事例を挙げることであり、一つは比喻を以て事の是非を解明することである。そうした表現形式の特徴とは別に、秋水の批判的言説に一貫して据えられている観点がある。それは、道徳的観点である。さらに言えば、秋水の道徳的観点を支える思想的支柱は近代文明に対する信念であった。以下、この道徳的観点と近代文明への信念に沿って、愛国主義に対する秋水の言説を読み解いてみたい。

愛国心の本質を暴くためにまず挙げられているのは、以下のとおり『孟子』から引用された井戸に落ちんとする幼児の故事である。

けだし孩児の井に墮ちんとするを見ば、何人も走ってこれを救うに躊躇せざるべきは、子輿氏我を欺かず。もし愛国の心をして真にこの孩児を救う底のシムパシー、惻隱の念、

慈善の心と一般ならしめば、美なるかな愛国心や、醇乎として一点の私なきなり。

しかれども思え、真個高潔なる惻隱の心と慈善の念は、決して自家との遠近親疎を問わざること、なお人の孩児の急を救うに方って、その我の子たると他の子たるを問わざるが如し。(20頁)

「惻隱の念」あるいは「慈善の心」は「私なき」ものであり、「自家との遠近親疎」は問わないものである。そして、愛国心が惻隱の念や慈善の心と同様であるならば、「自家との遠近親疎」は問わないはずであると、秋水は問いかけているのである。例えば米国に植民地にされたフィリピンの独立を祈る「世界万邦の仁人義士」(20頁)としてのアメリカ人がいたとして、「今の愛国者や国家主義者は、(中略)比律賓のために祈るの米人をもって、愛国の心なしと罵らん」(21頁)と指摘した上で、秋水は「いわゆる愛国心が、醇乎たる同情惻隱の心にあらざる」(21頁)と断じ、さらに重ねて、愛国心の本質を以下のように暴くのである。

何となれば愛国心の愛するところは、自家の国土に限ればなり。自家の国人に限ればなり。他国を愛せずしてただ自国を愛する者は、他人を愛せずしてただ自家一身を愛する者なり。(21頁)

以上のとおり、愛国心を否定する秋水の思想には明らかに道徳的かつ人道的観点が内在していることが分かる。さらに秋水は、世の多くの人々が何ら疑うことなく愛国心は故郷を愛する素朴な心と同様であるという通念を取り上げ、そこに隠された非道徳的(=非人道的)な心理あるいは無意識を明らかにすることで郷土愛をも含む愛国心を批判する。「故郷を愛するの心は貴ぶべし。しかれどもまた甚だ卑しむべき者あり」と断定する秋水は、郷土愛を以下のように分析している。

誰か垂髻の時、竹馬に鞭つの時、真に故郷の某山某水の愛すべきを解するか。彼らが懐土望郷の念を生ずるは、実に異郷他国なる者あるを解するの以後にあらざるや。それ東西飄蓬、壯心幾たびか蹉跎して転た人情の冷酷を覚るの時、人は少年青春の愉快を想起して旧知の故園を慕うこと切なり。彼の風土甚だ身に適せず、食味甚だ口に適せず、知己の志を談ずるなく、父母妻子の憂を慰するなくして、人は故園を思うこと切なり。彼らは故郷の愛すべく尊うべきがために思念するよりは、むしろただその他郷の忌むべく嫌うべきがためなるなり。故郷に対する醇乎たる同情惻隱にあらざるして、他郷に対する憎悪なり。失意逆境の人多く皆な然り、彼らの他郷を憎悪せずんば、未だかつて特に故郷を思慕せざるなり。(21-22頁)

しかし、郷土愛は「失意逆境の人」だけでなく「得意順境の人」の心情でもあるはずであるという通念に対しても、秋水は「得意の人の故郷を思慕するは、その心ことさらに卑しむべきあり。彼らは即ち郷里の父老知人に向ってその得意を示さんと欲するのみ」(22頁)というより厳しい批判の言葉を浴びせる。こうした批判の根拠として、秋水は『史記』から

「富貴にして故郷に還らずんば錦を衣て夜行くが如し」という一節を引用し、そこに示された「虚栄」や「虚誇」こそが郷土愛の本質であると断ずるのである。

以上のように、秋水の郷土愛、すなわち愛国心に対する批判は極めて厳しく、直線的かつ極端である。その批判を支えているのは、すでに上で言及した道義意識に貫かれた道徳的観念である。多くの人が自然の心情の発露として覚える故郷や同胞への愛着には、自分たちさえ良ければ他者はどうなっても構わないという極端に自己中心的な価値観が内在しており、それが国家に敷衍されたものが愛国心あるいは愛国主義である、というのが秋水の愛国心の定義である。

さらに愛国主義の本質を示すために、秋水は古代ギリシア・ローマから出発し、近代のイギリス、フランスそしてドイツの事例を取り上げて、「愛国心は、即ち外国外人の討伐をもって榮譽とする好戦の心なり、好戦の心は即ち動物的天性なり」(27頁)と結論づける。このように、秋水の愛国主義批判はただ日本の愛国主義だけに向けられたのではなく、いわば日本が範としていた本家本元のヨーロッパ列強のそれに向けられていたのである。

秋水が愛国主義を「好戦の心」であるとして否定するとき、それと対極にあり、人々が目指すべき理想であると訴えるものは「平和と博愛の福利」(82頁)である。平和と博愛に満ちた世界を構築することこそが、秋水の道徳的観念の根幹をなす理想である。「日本人の愛国心は、征清の役に到りてその発越空湧を極むる振古かつてあらざりき」(43頁)というように、日清戦争後の愛国主義が称揚される日本において、秋水はいささかアイロニカルに天皇を非愛国主義的な君主であるとする前提を立てて、「平和と博愛」へと向かうことこそが「人道」であり「正義」であると主張する。

(前略) 我皇上は自由と平和と人道を重んじ給う、豈にその臣子をしてヘロットたらしむるを希い給わんや。我は信ず、我兵士をして、皇上のためと言うよりは、むしろ進んで人道のため正義のためと言わしめば、これ皇上の嘉納し給うところなるを、これ真に勤王忠義の目的に合する者なるを。(45頁)

「日本の皇帝は獨逸の年少皇帝と異り。戦争を好まずして平和を重んじ給う」(41頁)という言葉はどこまで信じてよいのかは別として、秋水は天皇を盾にして「真に世界の平和のため、人道のため、正義のため」(43頁)にこそ愛国主義を否定したのである。では、秋水は「世界の平和」、「人道」ならびに「正義」を実現するための淵源はいかなるものであると考えていたのであろうか。

3. 道義の淵源としての近代文明

秋水が道義の淵源と看做していたものは、明らかに近代文明である。秋水は、愛国心を煽りプロイセンの覇権を実現したビスマルクの理想を「実に中古時代未開人の理想たるを免れず」(37頁)と断定し、愛国主義に熱狂する「多数国民の道徳はなお中古の道徳なり、彼らの心性はなお未開の心性なり、ただ彼ら自ら欺き人を欺かんがために、近世科学の外皮をもって掩蔽するに過ぎざるのみ」(37-38頁)と批判する。この「中古の道徳」に対立し、そ

れを克服するものこそが「近代文明の高遠なる道義と理想」(41頁)なのである。

ここで確認しておかなければならないことは、秋水の思想の支柱と看做されている「社会主義」と近代文明との関係である。『帝国主義』の後の1903年に『社会主義神髓』を発表しているため、秋水は社会主義者であるというのがその思想に関する一般的な解釈である。また『帝国主義』においても愛国主義と対峙し、それを破壊するのはまさに「近世社会主義」(41頁)であるという言説が認められる。その意味で、秋水が「社会主義」を土台にして自らの思想を構築していたことは間違いない。しかし、すでに第1節で述べたように、『帝国主義』執筆当時の秋水の思想はマルクス主義に基づく暴力革命を目指したものではなかった。その根拠の一つは、『帝国主義』における「社会主義」に関する言説が、以下の通り具体的にはドイツの社会民主党に対する共感として記述されていることにある。

古代の蛮野的にしてかつ狂顛なる愛国主義が、近代文明の高遠なる道義と理想を圧伏し去ること、今後もなおビスマルク公当時の如くなるを得るやは、現世紀の中葉を待て決すべし。しかも独逸の社会主義が隆然として勃興し、愛国主義に向って激烈なる抵抗を為せるを見れば、いかに戦勝の虚栄と敵国の憎悪より生ぜる愛国心が、一毫も国民相互の同情博愛の心に益するところなきを知るべからずや。(41頁)

『帝国主義』が発表された1901年当時のドイツ社会民主党のイデオロギーは、ベルンシュタインらによって提唱された社会改良主義をめぐる修正主義論争の最中にあり、暴力革命による体制転覆ではなく議会活動による社会改良を優先すべきであるという考え方に傾いていた。修正主義は当然ながら社会主義正統派のカウツキーやローザ・ルクセンブルクによって厳しく批判された。しかし、マルクス主義的革命主義が否定されることはなかったものの、現時点では社会改良に努めるべきだという修正主義を容認する折中主義的な思想が党の中核をなすことになったのである。こうした修正主義と暴力革命主義の対立による党の分裂を回避するために折衷案を考えたのが、秋水が自らの思想の範と看做し「例言三則」にも挙げているアウグスト・ペーベルだったのである。

以上の通り、20世紀初頭の社会主義は後のロシア革命時のイデオロギーと比して、ヨーロッパにおいても未だ流動的な思想であったことが分かる。つまりその当時は、マルクス主義的な暴力革命主義と表裏一体をなす確固とした革命イデオロギーとしての社会主義はまだ存在していなかったと言えるのである。また、秋水が世界の帝国主義を俯瞰する際に参考にしたのが、これもすでに第1節で述べたように、むしろロバートソンやホプソンの進歩的な自由主義であったことを考え合わせると、当時の秋水の「社会主義思想」は必ずしも革命イデオロギーとしての社会主義ではなかったと理解することができる。その点について、ミドルトンは以下のように指摘している。

幸徳がロバートソンやそのほかの論者に依存していたということは、かれが社会主義よりもむしろ、急進的な自由主義の政治に多くを負っていたことを示している。『帝国主義』が書かれたのは、社会主義者と自由主義的な進歩主義者が、まさに決別しようとしていた時期である。(中略)また、この時期の社会主義の言説が、可塑性に富み、また

多元的であったことも強調されなければならない。「真の」社会主義という固定したドグマは、いまだ存在していなかった¹¹⁾。

秋水はペーベルやロバートソンなどの思想に接することで、修正主義的社会主義や急進的自由主義の思想の潮流の中に身を置いていたことになる。秋水はこうした脈絡の中で19世紀にその理念と社会制度を発展させた近代文明を肯定することで、その徒花としての帝国主義を否定したのである。その意味で、当時の秋水の思想は、自ら「社会主義」という概念を使っているにもかかわらず暴力革命思想ではなく、近代文明に基づくより公正な社会の実現を目指す社会改良的な思想だったと理解すべきなのである。このことに関連して、秋水は以下のように述べている

我は信ず、社会の進歩は、その基礎必ずや真正科学的智識に待たざるべからず、人類の福利は、その源泉必ずや真正文明的道德に帰せざるべからず。而してその理想は必ずや自由と正義にあらざるべからず、その極致は必ずや博愛と平等にあらざるべからず。
(16頁)

「文明的道德」はもとより、「科学的智識」、「人類の福利」、「自由と正義」さらには「博愛と平等」などの概念はすべてフランス革命後の19世紀の近代ヨーロッパがその実現を目指し、紆余曲折を経ながらも確立してきた近代文明の理念である。秋水はこうした近代文明の理念に基づいて、愛国主義を原動力として帝国主義化した国民国家を批判したのである。とは言え、秋水の思想が拠って立つ近代文明は、19世紀に本格始動した国民国家が生み出したものであったということをおぼろげに忘れてはいけぬ。また、近代文明が絶えざる進歩と成長という循環から逃れることができない宿命を背負っていたことも、改めて確認しておかなければならない。こうした近代文明のパラドックスを秋水がどのように理解していたかについては、『帝国主義』の中で明らかにされていない。むしろ「文明の進歩と福利の増加」(41頁)はアプリアリに連動するものとして措定されていると言える。だからこそ、近代文明に基盤を置く国民国家が帝国主義化することは、秋水にとっては文明の破壊以外のなにもものでもなかったのである。曰く、「(前略) 今やこの愛国的病菌は朝野上下に蔓延し、帝国主義的ペストは世界列国に伝染し、二十世紀の文明を破毀し尽くさずんばやまざらん」とす(116頁)。

以上のように、秋水の帝国主義批判は近代文明の理念に基づくものであった。また秋水が訴える「社会主義」は、人民全般に「自由と正義」ならびに「博愛と平等」(16頁)をもたらし社会体制を実現することを意味するものであり、一階級による権力奪取のための党派的な社会主義イデオロギーではなかった。その意味で、秋水の思想は階級闘争的な性格ではなく、近代文明がもたらした自由・平等・博愛という人道に基づく社会正義の実現を求めるものだったと解釈できる。このように近代文明こそが人道と正義の淵源であると看做している意味において、秋水の帝国主義批判は近代文明主義者としての道德観に基づいていたと言える。まさにこの道義的観点こそが秋水の帝国主義論の独自性であり、ホブズンやレーニンの帝国主義論の経済的観点、さらにはアーレントの帝国主義論の政治哲学的観点とは異なる視座に立脚していたのである。

4. 軍国主義批判

「帝国主義はいわゆる愛国心を経となし、いわゆる^{ミリタリズム}軍国主義を緯となす」という、すでに引用したこの指摘こそが秋水の帝国主義批判の要諦をなしている。自国だけの利益を求める愛国主義に支えられた軍国主義こそ、人類に福利をもたらすべき近代文明を破壊するものである。帝国主義者は軍国主義こそが自国の繁栄を実現する方策であり、それによってさらに帝国主義を支持する国民の愛国心を満足させるものだと考えた。帝国主義における愛国主義と軍国主義の絶えざる循環のメカニズムを看破したのも、秋水の帝国主義批判の特徴であると言える。日本を含め、19世紀末から20世紀初頭の世界はまさに軍事力を背景とした領土ぶんどり合戦が一層激しくなる時期だった。愛国主義を実行する行為としての軍国主義が、如何に「人類の幸福を阻害するかを」秋水は以下のように指摘している。

しかも如何せん、この卑しむべき愛国心は、今や発して^{ミリタリズム}軍国主義となり、帝国主義となつて、全世界に流行するを。我は以下更に進んで、軍国主義が如何に世界の文明を戕賊し人類の幸福を阻害せるかを見ん。(50頁)

軍国主義を推進する者は、さまざまな理由や根拠を挙げることでその正当性を訴える。ドイツのモルトケ将軍やアメリカのマハン大佐はその代表的な人物であり、秋水は彼らが掲げる軍国主義の根拠の虚偽性をつつひとつ暴くのだが、それに先立ってまずは軍国主義一般が掲げている自国の防禦のためという根拠はまったくの欺瞞であると指摘する。曰く、「然り軍備拡張を促進するの因由は、実に（防禦とは）別にあるあり。他なし一種の狂熱のみ、虚誇の心のみ、好戦的愛国心のみ。但だ武人の好事にして多く韜略を弄するがためにするもまたこれあり（後略）」(51頁、カッコは引用者による)。

秋水の軍国主義批判は、当然のこととして愛国心批判と同じ観点、すなわち近代文明に基づく道義的観点からなされている。その軍国主義批判は、世界の軍国主義に通底する反文明的性格を暴くことに収斂すると言ってよい。軍国主義者が「鉄が水火の鍛錬を経て犀利の剣となるが如く、人は一たび戦争の鍛錬を経ずんば決して偉大の国民たるを得ず」(59-60頁)として、文明・文化に対する軍国主義の必要性を主張することに対して、秋水は古代ギリシア・ローマから19世紀に至る古今東西の事例を挙げたうえで、「我は戦争が社会文芸の進歩を阻礙するを見たり、未だこれが発達を助くるを見ず」(62頁)と述べることで、軍国主義が文明・文化の発展と相容れないものであることを明らかにしようとする。秋水はさらに軍国主義が文明・文化の発展に何ら寄与するものでないことを明らかにするために、マハン大佐の「軍備と徴兵の功德」(54頁)に関する言説をまっこうから否定する。マハンは「年少の国民が秩序と服従と尊敬とを学習すべき兵役という学校に入り、(中略)克己や勇気や人格が、軍人の要素として養成せられん」(54-55頁)と述べて、兵役が人間形成に寄与するという謂わば「道徳的効用」を説くことによって、当時の世界に大きな影響を及ぼしていた。さらにマハンは、国民は軍事教練によって「善良なる原因のために戦うの心」(56頁)を獲得することで「善美の事」(56頁)をわきまえ、延いては「平和は益す確保され戦争はその数を減じ」(55頁)ると説く。このようにマハンが主張する所謂「軍事の道徳的功德」に対

して、秋水は以下のように正面から異を唱えている¹²⁾。

独仏はその戦争の共倒れに終うべきを知る、露帝は一等国と戦うの結果が破産と零落なることを知る。

彼ら強国の相戦わざるはこれがためのみ、徴兵の教練が尊敬心を養成せるの功果にあらざるなり。見よ彼らは今や大にその武を亜細亞、阿非利加に用いんとするにあらずや。然り彼らが虚栄の心、好戦の心、野獸的天性は、かえって軍人的教練によって熾に煽揚せられつつあるなり。(59頁)

さらに軍事が近代的な武器の発明を促していることによって、文明の進歩に寄与しているという考え方に対しては、(本来は文明の進歩は平和的な科学の進歩の結果だが)仮にそうだとしたとしても、そうした軍事的な発明が「国民をして高尚偉大ならしむるの智識と道徳において、いくばくの貢献するところあるや」(62頁)と、軍国主義と文明の進歩との親和性をやはり道徳的観点から否定している。その上で、軍国主義が人類の幸福のために必要な社会と文明の進歩に何ら貢献することはないと、秋水は以下のように結論づけているのである。

然り軍国主義は、決して社会の改善と文明の進歩に資するを得る者にあらず、戦闘の習熟と軍人的生活は、決して政治的社会的に人の智徳を増進し得る者にあらず。(63頁)

以上の結論の証明として、秋水は古代の「アレキサンドル、ハンニバル、シーザー」(63頁)から近代の「フレデリッキと奈勃翁」(64頁)や「モルトケ、ネルソン、ウェリントン」(66頁)等々に至る歴史上の軍人に共通する反文明のおよび反社会進歩的な性格を、「而して彼らは如何に賢なるも、その軍人たる職務としては、その軍人的教育の功果としては、社会全般に向って何の利益をも与うることなし」(67頁)と総括する。当然のこととして、日本の軍国主義を主導した軍人・政治家も以下のように辛辣に批判されている。

東洋のモルトケ、ネルソン、ウェリントンをもって擬せられ崇拜さるるの山県侯や、樺山伯や、高島子や、明治の政治史、社会史において果して何事の特筆すべき者あるか。選挙干渉議員買収の桶を作って、我社会人心と腐敗を墮落の極点に陥らしめたる罪悪は、彼ら実にその張本たるにあらずや。(66頁)

秋水が軍国主義批判のために挙げている歴史的事例はあまりにも数が多く、すべてを紹介することはできないが、その批判はどれも近代人が持つべき正義人道に基づく道徳観の欠如に向けられていると言ってよい。1894年にフランス陸軍で起こったドレフェス事件を取り上げて、秋水は軍部一般が如何に反道徳的性格に貫かれているかを明らかにしようとする。

近時世界の耳目を聳動せる仏国ドレフェーの大疑獄は、軍政が社会人心を腐敗せしむる較著なる例証なり。

見よその裁判の曖昧なる、その処分之の乱暴なる、その間に起れる流説の、奇怪にして醜辱なる、世人をして殆ど仏国の陸軍部内はただ悪人と痴漢とをもちて充滿せらるるか疑わしめたり。怪しむなきなり、軍隊の組織は悪人をしてその兇暴を逞しくせしむること、他の社会よりも容易にして正義の人物をして痴漢と同様ならしむるの害や、また他の社会に比して更に大なり。何となれば陸軍部内は压制の世界なればなり、威権の世界なればなり、階級の世界なればなり、服従の世界なればなり、道理や徳義やこの門内に入るを許されざればなり。(71-72頁)

近代人が長い歴史の末に到達した人道と博愛の理念に反して、軍国主義の本質は「蛮人の倫理学、蛮人の社会学」(53頁)以外のなにものでもないというのが、秋水の近代文明主義者としての道徳的な軍国主義批判である。秋水は、長い歴史の中でようやく「十九世紀中葉において一たび奴隷の域より脱出せる多数の人類」を「再び奴隷の域に沈淪せしむるのみならず、更に野獣の境にまでも陥擠せんとする」(49-50頁)と述べているように、愛国主義と軍国主義に基づく帝国主義が人類の道義を求める近代文明を破壊するものであると看做しているのである。

軍国主義の反人道的な本質を形にしたものが戦争である。愛国主義に突き動かされた諸国民は自国の利益獲得を目的とする戦争を許容するばかりか、その勝利を期待し称賛した。それこそが、秋水が軍国主義を批判した時代の実相であり、世界は確実により破壊的な戦争、すなわち世界規模の帝国主義戦争としての第一次世界大戦に向かっていたのである。政府の弾圧によって刑場の露と消えることになる秋水自身は第一次世界大戦の勃発を見ることはなかったが、『帝国主義』はこの史上初の世界規模の帝国主義戦争を予見した書であったとも言えるのである。

おわりに

愛国主義と軍国主義を詳細に分析したのちに、秋水はようやく本書の目的である帝国主義批判の論陣を張る。その論もそれまでと同様にまずは明快な結論を述べたのちに、詳細な個別事例を挙げることで展開される。すなわち、その結論は「(前略)愛国心と軍国主義の狂熱がその頂点に達するの時に於いてや、領土拡張の政策が全盛を極むるに至るは、固より怪しむに足らず」(85頁)というものである。さらに新たな大帝国建設のための「領属版図の大拡張は、多くの不正非義を意味する」(85頁)、つまり平和的な開拓などでなく「皆これを行行軍国主義をもってせるにあらざるや、武力をもってせるにあらざるや」(86頁)と指摘し、「しからば即ち大帝国の建設は直ちに切取強盗の所行にあらざるや」(86-87頁)と論断するのである。こうした帝国主義の「野獣的」本質と対極にあると措定されるのが、自由・平等・博愛に基づく文明の進歩による平和国家の繁栄である。ここにも、近代文明主義者としての秋水の道徳的国家観がよく現れている。

国家の繁栄は決して切取強盗によって得べからず、国民の偉大は決して掠奪侵略によって得べからず、文明の進歩は一帝王の専制にあらざるや、社会の福利は一国旗の統一にあ

らず、ただ平和なるにあり、ただ自由なるにあり、博愛なるにあり、平等なるにあり。
(88頁)

以上のように、道徳的観点から帝国主義国家を批判することに軸足を置いた上で、秋水は帝国主義者が「古の大帝国建設が帝王政治家の功名利慾のためにせるは洵とに然り、然れども今の領土拡張はその国民の膨脹やむをえざればなり」(89頁)と国民国家のための必要悪としての帝国主義であると主張することの欺瞞を以下のように暴く。

今の帝国主義は国民の膨脹なるか。これ少数政治家軍人の功名心の膨脹にあらざるか、これ少数資本家、少数投機師の利慾の膨脹にあらざるか。(中略)その国民の多数が生活の戦闘ストラツグルは日に激甚に赴けるにあらざるや、貧富は益す懸隔しつつあるにあらざるや、貧窮と飢餓フナーキスと無政府党と、及び諸般の罪悪は、益す増加しつつあるにあらざるや、かくの如きにして彼ら多数の国民は何の違あって、能く無限の膨脹をなすことを得んや。(89頁)

ここに至って秋水は、帝国主義の本質、すなわち少数の投資家と国家権力、ならびにセル・ローズに代表される海外領土における投機師¹³⁾ら三者の結託による利益収奪に批判の焦点を合わせる。国家権力と投資家と投機師は相互に結託することで、「掠奪者をして獣力を振り破壊を逞くせしむる」(92頁)強大な侵略装置として新たに掠奪した領土の住民を抑圧するだけでなく、「既に十億円の富をもって両国民(英国及びトランスワール)の鮮血に代え」(91頁、カッコは引用者による)て己が個人的利益の獲得を目指したのである。このような国家権力と投資家と投機師は、英国のみならずドイツなどの欧州列強やアメリカ、さらには日本の帝国主義に共通する収奪装置としての堅固な三者連合をなしていた。秋水がこうした私的利益のための国家装置に対峙させ、これを打ち破ることができると考えたのが「社会主義」、つまりすでに上述した近代文明の理念に基づく進歩的自由主義であったと言える。秋水は「人民の権利、自由、独立を尊重し保護し、近世文明の教義によりて、世界各国の文化の關係、交通の關係を保護する」(93頁)と謳ったドイツ社会民主党の総会決議を引用しながら、「然り掠奪、征服によって領土の拡張を図れる欧州諸国の帝国主義は、実に文明人道に対する大々の侮辱たるなり」(93頁)と断ずることで、帝国主義を近代文明の理念に基づく道徳的観点から否定したのである。

ホブソンは帝国主義の淵源が資本主義経済に宿痾のごとくつきまとう不況による過剰生産、ならびにそれによって投資先を失った余剰資本にあったこと、そして投資家がそうした余剰資本の捌け口を、国民経済には不要な新たな海外領土における投機的事業に求めたことに見抜いた。ホブソンと同じように、秋水も帝国主義の利益構造が過剰生産と余剰資本にあることを理解していた。秋水の帝国主義論がホブソンのそれより一年早い出版であったことを考えると、この類縁性は秋水がホブソンの同僚であったロバートソンの帝国主義解釈に多くを負っていたことにあると考えてよい。ちなみに、帝国主義の利益構造とその思想的過誤を秋水は以下のように批判している。

彼ら（帝国主義者）は何をもって新市場の開拓を必要とするや、曰く資本の饒多と生産の過剰に苦めばなりと。ああこれ何の言ぞ、彼ら資本家工業家が生産の過剰に苦しむと称する一面においては、見よ幾千万の下層人民は常にその衣食の足らざるを訴えて号泣しつつあるにあらざるや。彼らが生産の過剰なるは、真にその必要なきがためにあらざりて、多数人民の購買力の足らざるが故のみ、多数人民の購買力の乏しさは、富の分配公平を失して貧富の益す懸隔するの故のみ。（102頁、カッコは引用者による）

以上のように、秋水の帝国主義批判はあくまでも困窮する人民の生活を改善するためになされている。秋水が人民の生活の改善のために希望を託すのは、「欧州の天地を掃除」した「十八世紀の末年仏国革命」（116頁）がもたらした近代文明であった。しかるに、「帝国主義のベストは世界列強に伝染し、二十世紀の文明を破毀し尽さずんばやまざらん」とす（116頁）というのが現実であった。ここにも、秋水の帝国主義批判の独自性とも言える文明論的な視座が現れている。秋水は、自らが理想とする文明社会こそが人民の物質的豊かさをも実現するという信念に基づいて、帝国主義を批判しているのである。これは、20世紀以降の歴史を知っている我々から見ると、いささか楽観的に過ぎると言えるかもしれないが、つきつめればより多くの人々を豊かにするのは、秋水が訴えたように、人間の自由と平等であり、物質的豊かさをもたらす科学的近代文明であることは間違いない。問題は、「一般労働に対する利益の分配を公平にするにあらざるべからず」（103頁）と秋水が言う通り、文明がもたらす豊かさを如何に分配するかにある。さらに秋水は、目指すべきは独り一国民の幸福ではなく、「人類全般の福利」であると訴えることで帝国主義批判の筆を擱いている。

（前略）ブラザー・フードの世界主義は即ち掠奪的帝国主義を掃蕩削除することを得べけんなり。

能くかくの如きにして、吾人は初めて不正、非義、非文明的、非科学的なる現時の天地を改造し得て、社会永遠の進歩をもって期すべく、人類全般の福利をもって全くすべきなり。（117頁）

秋水が訴え求めた社会は必ずしも実現したとは言えない。特に「世界主義」に基づく「人類全般の福利」は、その実現には程遠い。19世紀後半に始まった帝国主義は第二次世界大戦の終結を以て一応の終わりを見たようにも思われた。しかしアーレントが指摘している通り、その後も帝国主義は形を変えて存続してきたとも言える¹⁴⁾。それは、今日新たな愛国主義が世界各国で台頭しているのを目の当たりにするとき、改めて首肯せざるをえない指摘である。その意味で、秋水が残した文明論的かつ倫理的な帝国主義批判は、世界が目指すべき理想を示す言説として、今日でもまだその有効性を失っていないと言えるのではないだろうか。

註

幸徳秋水の『帝国主義』からの引用は直後に頁を記す。なお、使用テキストは次の通りである。幸徳秋水：『帝国主義』、岩波文庫、2009年。

- 1) ホブソンの『帝国主義論』に関しては、拙論「帝国主義論考～ホブソンの『帝国主義論』に関する一考察」(明星大学研究紀要第27号、人文学部日本文化学科、2019年3月)を参照されたい。
- 2) レーニン：『帝国主義』、岩波文庫、2014年。例えば、レーニンは本書の162頁や165頁でホブソンを引用している。ハナ・アーレント：『全体主義の起原2、帝国主義』、みすず書房、2013年。アーレントの帝国主義論とホブソンのそれとの関係に関しては、拙論「ハンナ・アーレントの帝国主義論——国民国家崩壊の『物語』——」(明星大学研究紀要第28号、人文学部日本文化学科、2020年3月)を参照されたい。
- 3) レーニン：『帝国主義』、岩波文庫、2014年、199頁。レーニンの『帝国主義』の本来の題目は『資本主義の最高の段階としての帝国主義』である。
- 4) 幸徳秋水：「例言三則」、『帝国主義』所収、5頁。秋水は、本論を欧米識者の諸説を参考にして書いたということを明らかにする意味で次のように述べている：「故に我は敢て僭して『著』といわずして『述』と書す」。
- 5) 糸屋寿雄：『幸徳秋水』、清水書院、2015年、52頁
- 6) 前掲書：80-81頁
- 7) 山泉進：幸徳秋水『帝国主義』の「解説」、168頁
- 8) ベンジャミン・D・ミドルトン：「幸徳秋水と帝国主義への根源的批判」(梅森直之訳)、『初期社会主義研究』第12号、1999年、136頁
- 9) 前掲書：180頁
- 10) 前掲書：140頁。ミドルトンは次のように指摘している：「このグループ(レインボー・サークル)は、ウィリアム・クラーク(William Clarke)とマーレイ・マクドナルド(Murray MacDonald)によって、1893年に『あらゆる意見の進歩派を糾合する目的で』創設されたものであった」、また「ホブソンによれば、このサークルの機関紙『進歩主義評論』(*The Progressive Review*)の創刊(1896年)こそが、『新自由主義(New Liberalism)』の起源をなすものであった」。(なお、ここで言う「新自由主義」は、今日の日本で言う「ネオリベラリズム」とはまったく異なる概念であり、社会的公正を重視する「ソーシャル・リベラリズム」と呼ばれることもある。)
- 11) 前掲書：136頁
- 12) 前掲書：148頁。ミドルトンは、秋水のマハン批判をジェンダー論的な言説と捉え、その先進性を次のように評価している：「(前略)幸徳は、軍事的な優越の技術的な基礎を詳述し、軍事的な戦略の『ごまかしとまづき』(118-32)を暴くことに甘んじたロバートソンの先を行った。すなわち、かれは、戦争のジェンダー・アイデンティティを逆転させたのである。マハン(Alfred Thayer Mahan)がおこなった、兵役は少年を大人に変えるという主張に対し、幸徳は猛烈に反発した。かれは言う。『戦争は女性的なり』、『戦争は陰謀なり』(『帝国主義』第三章)」。
- 13) 秋水が「投機師」と呼ぶ事業家のことを、ホブソンは「損なわれた性格及び経歴の者」(ホブソン：『帝国主義論、上巻』、101頁)、またアーレントは「モップ」(『全体主義の起原2、帝国主義』、42頁)と呼び、帝国主義を推進したキープレイヤーと看做している。
- 14) 拙論参照：「ハンナ・アーレントの帝国主義論——国民国家崩壊の『物語』——」